2017年6月25日朝刊掲載

生きる語る

デフラグビー 挫折越え

聴覚障害 言葉に頼らず分かり合える

共に戦い 人生の新しい扉が開けた

耳の不自由な人たちによる「デフラグビー」というスポーツがある。「デフ」とは、英語で聴覚障害の意味。ルールは一般のラグビーと同じだが、試合中は激しい接触プレーが多いため、補聴器を外しており、審判のホイッスルも仲間の掛け声も聞こえにくい。

選手同士は手話やサインでコミュニケーションを取るが、「相手の立場を深く想像することで、言葉に頼らなくても分かり合える。仲間との強い絆を感じられるのが魅力」。デフラグビーの全国組織で広報担当を務める柴谷晋さん(41)はそう言って、笑顔を見せる。

柴谷さんは2002年、ニュージーランドで開かれた第1回世界大会(7人制の部)の日本代表選手だった。

地元・茨城県で中高6年間はラグビー一筋。強豪で知られる茗渓学園高校(つくば市)の3年の時、「花園」出場も果たしたが、大学時代に選手として挫折。突発性難聴を発症してからはグラウンドに背を向け、もう二度とラグビーに関わることはないと思っていた。

■□□

中学、高校でチームのレギュラー争いに明け暮れ、大学でも部活動を続けたが、けがで試合に出られない時、かつてのチームメートが活躍する姿をテレビで見た。自分だけ取り残されているような気がして、2年生の夏、ラグビー留学を決意し、フランスへ渡った。

しかし、入ったチームで1、2回、試合に出たものの、語学力不足からチームメートとなじめず、練習で肩を痛めたことを機に距離を置くようになった。「ラグビーは向いていなかったんだ」。気晴らしに旅行したスペインで、異変が起きた。祭りを見た帰り、疲れた状態で酒を飲み、大音量が流れるバーで眠り込んだ翌朝、自分の声が聞こえないことに気付いた――。

帰国後、左耳は回復の見込みがないと、医師から告げられた。声が聞き取りづらくなったことで次第に人を避けるようになり、ラグビーもやめた。

□■□

デフラグビーとの出合いは、広告会社に勤めていた01年秋頃。ラグビー好きの広告主に合わせようと、話題を探していた時だった。日本ラグビー協会のホームページで「第1回聴覚障害者ラグビー世界大会の日本代表選手を募集」という小さな告知に目が留まった。

デフラグビーの存在すら知らなかったのに、自分でも説明できない衝動に駆られ、すぐに応募のメールを送っていた。「これをやらなくちゃいけない」。翌日、練習への参加を求める返信があった時、ラグビーへの思いが再び燃え上がった。

手話を一から覚え、練習を重ねて02年8月、第1回の世界大会に桜のジャージーを着て出場。準決勝でニュージーランドに24対12で勝利した。ちょうど27歳の誕生日だった。「学生時代は試合に出るたび重圧と不安しか感じなかったが、仲間を信じ、共に戦ったことで初めてラグビーが楽しいんだと感じた」

□□■

大会出場でさらに人生が変わった。

それまで補聴器を付けることを避けていたが、同じ境遇の多くの人たちと出会い、抵抗がなくなった。やっと障害を受け入れることができた。15年には現役を引退し、現在は、NPO法人「日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟」の広報担当として、イベントなどを通してデフラグビーの魅力を発信。さらに、今春から日野自動車ラグビー部の戦術分析担当として活躍する。

「若い時の挫折に後悔はある。でも、デフラグビーという全く違う世界を経験したことで、自分の考えや思いを伝えることの難しさや工夫を知った。挫折を受け入れることで、人生の新しい扉が開けた」。やりたいことは、まだたくさんある。挑戦にノーサイドはない。

(藤亮平)

下日野自動車ラグビー部の選手たちに戦術の説明をする柴谷さん(中央)下試合中は選手の動きをチェックしてパソコンに入力(10日、東京都町田市で)=いずれも奥西義和撮影